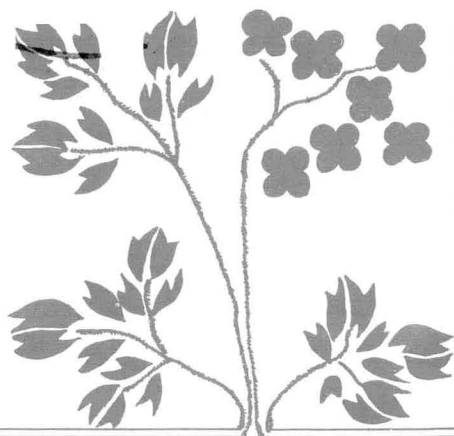


島尾敏雄

日本の作家

おりじん書房



1974年 8月20日 初版印刷
1974年 9月10日 初刷発行

日本の作家

著 者 島尾 敏雄

担 当 片柳 葉子

装 幀 松井又三郎

発行者 平山 博

発行所 株式会社おりじん書房

東京都目黒区下目黒三一―一二二

電話 〇三(四九二) 六九一五(代)

振替 東京一六七三六六

印刷所 株式会社太平印刷社

(乱丁・落丁本はお取替えいたします)

書籍コード 〇〇九三―七四〇〇四―五三三七

目

次

目次

I

二葉亭四迷	9
木村 曙	21
幸田 露伴	33
森 鷗外	43
樋口 一葉	53
国木田独步	63
田山 花袋	73

正宗 白鳥

鈴木三重吉

武者小路実篤

豊島与志雄

室生 犀星

牧野 信一

小林多喜二

林 芙美子

II

豊島与志雄小論

阿部知二小論

舟橋聖一小論

後書

83

95

105

115

125

135

145

155

165

179

187

195

日
本
の
作
家

島
尾
敏
雄

二葉亭四迷

日本の近代文学、つまり明治以前の文学とはつきり一線をひかなければならない今風の文学を打建てたのは誰かと言いますと、それが二葉亭四迷であることは今日誰もが認めているところですよ。

明治になって色々な人が日本に新しい文学を生み出そうとして苦勞をしました。例えば坪内逍遙などその代表的な一人ですが、今までの遊戯的な気分の多い戯作者のやり方では駄目だという理窟は分かっても、さて仲々これこそその新しい文学の実物だと、出して見せることが困難だったのです。

それを二葉亭四迷がやってみせてくれました。

それは明治二十年にその第一篇を発表した「浮雲」という小説でありました。

続いて翌々年の二十二年迄にその第三篇までが発表されました。発表されたのは第三篇まででしたが、作者の意図はもっと先の方まで書くつもりであったようです。だから、小説の形と

しては未完成に終ってしまったわけですが、それにしても、この未完の形のままで立派に近代小説の骨格をそなえた文学に出来上っています。

二葉亭がその第一篇を発表した時は、数え年二十四歳でありました。

彼の年も若かったが、その当時の読者の頭も古い文学観から抜け出ていなかったのも、「浮雲」が十分に理解されたとは言えなかったようです。「浮雲」の値打が正当に認められるようになったのは、ずっとあとからのことであります。それにしても時代が下るにつれて、その値打の上昇は、当時の他の作品に比べてますます際立って来るばかりです。

それでは一体「浮雲」のどこが、それ程文学史的な価値を持っているのでしょうか。そしてそれによって日本の近代文学の礎石が打ちたてられたとまで言われるのでしょうか。

まず第一に、作者二葉亭が、近代小説の背骨であるリアリズムが何であるかということをはつきりつかんでいたことです。

その頃の読者は、小説というものに、荒唐無稽なまたは波瀾万丈の筋と言ったようなものを要求していたわけです。さもないければ、言葉のあやだとか、「いき」または「通」などという言葉であらわされる職業芸人風な人情や洒落や風俗の書き込まれた読物を要求していたわけです。そこにもって来て、二葉亭は、もっと人生にじかにふれ合った、自分たちの周囲にいきいきしている、ありふれた人間たちをつかまえて来て、客観性をもたせた人間像を作りあげたの

です。

当然筋らしい筋はなく、英雄豪傑や雲居の上の美女が現われて来るわけでもなく、むしろ事件は中途で中絶した形で、平凡な三、四人の人間交渉が、心理的場面にとらえられて書かれているのです。

もちろんこういう小説の作り方もあるという事を、まったく自分自身で考え出すことは出来ませんから、これはきつと二葉亭がロシア語を修得してロシア文学に親しんだことから学びとったことに違いありません。

「浮雲」の価値の第二は、この小説が言文一致即ち口語文で書かれていることでしょう。

明治以前の日本の小説は、和訓法という漢文をくずし読みした文体かまたは雅文体か、いずれにしても文章語で書かれていたわけです。そういう文章語では生き生きとした新しい内容を盛ることは出来ないで、文章をもっと話す言葉に近づけたいと言うことは、明治以後色々の人々によつて考えられまた試みられたことですが、これもまた実際に実物を示して成功することとは困難なことであつたのです。

その困難な問題にもまた、この「浮雲」が解決の口火をつけてくれました。

言うまでもなく、「浮雲」を言文一致で書くために、二葉亭は大へんな努力を払つたに違いありません。伝えられるところによると、当時日本にもようやく速記術が実用化された結果、

その頃評判の高かったはなし家三遊亭円朝の人情斬の速記本なども出はじめていたのですが、二葉亭はそういうものからも学びとるところが多かったということです。

ところでまた、それにも拘らず「浮雲」は、まだ完全に言文一致でもなく、根強く古い江戸時代の文学の文脈が残っていることを無視してはなりません。このことは、「浮雲」の持っている価値の第三の点に関係があります。

即ち、第三に、「浮雲」は色々な点で未完成であることです。

未完成が値打物だというのもへんなものですが、まったくこの「浮雲」はその未完成な所が値打なのです。というのは、その未完成は、作者の責任にばかり押しつけることの出来ない、いわば当時の日本の社会そのものの未完成や矛盾に深く根ざしたところの未完成であった為に、二葉亭が自分の芸術に向かって真剣であればある程、それを未完成のまま投げ出さざるを得なかったと言えるのです。

二葉亭はツルゲーネフ、ゴンチャロフ、ベリンスキイなどのロシア文学を通して、近代小説がどういうものであるかを体得しましたが、それをさて日本という場所で行なおうとした時にはたとど感したわけです。かたちだけ移し植えることは容易でしょうが、実際に日本の土の上に生き生きと根ざした文学作品を作る為には、日本の社会はまだまだ古い封建の殻の中にとじ込められていたし、表現方法としても最も手近にあったのはその時代にまだ尚全盛であった戯

作調のものであったのです。

そういう道具建ての中で、二葉亭は自分がロシヤ文学から学びとった文学理想を小説の中に表現する為になやみ、そのなやみに忠実であった為に先駆者のつまずきをして、中途でほおり出したのではないかと思います。

しばらく「浮雲」そのものについて点検してみましよう。

「千早振る神無月も最早跡二日の餘波となつた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうよくぞよく沸出でゝ来るのは……」

と言つた、いわゆる戯作調でこの小説は始まります。

内海文三という二十三になる内気な青年が主人公で、時代は明治二十年前後のことです。

文三は静岡在から東京の叔父を頼つて出京して来て某学校を終え某省の官吏になっていましたが、最近免職になつてしまします。

叔父は横浜の店にいていつもは不在、文三はその叔父の家に厄介になつていたのですが、そこには、「お摩りからするくの後配、歴とした士族の娘と自分ではいふが……チト考へ物。しかし兎に角、如才のない、世辞のよい、地代から貸金の催促まで家事一切独で切つて廻る程あつて、万事に抜目のない婦人。疵瑕と言つては唯大酒飲みで、浮気で、加之も針を持つ事がキツイ嫌ひといふばかり、さしたる事もないが、人事はよく言ひたがらぬ世の習ひ、『彼婦人

は裾張蛇すもつばりじやの変生へんしやうだらう』と近所の者は影人形かげにんがたを使つかっているような叔母のお政と、娘のお勢なりおほがいます。お勢は、「他人には薄情でも我子には眼の無い」あまり学問のない母親のお政に、言いきなり次第に育てられて、「首尾よくやんちゃ娘に成果なりおほせ」ているような娘です。当時の先走りの風潮に影響された人真似で、私塾に入塾して、英語などをなまかじりし、「男女交際論」だとか「西洋主義」だとか「親より大切な真理」などといったような事を口にしてはいますが、年頃なので、文三にはなかなか魅力があり、いつしかお互いに好意を持ち合うようになります。

しかし、文三の免職を機としてお政はがらりと態度が変わり、文三の同僚で、本田昇という課長にとりいる事の巧妙な立身出世型の才覚のある青年の方に、叔母もお勢も気持が傾き、二階の部屋で文三はうつうつとしたのしまず、ことごとく叔母やお勢や昇にうとまればずかしめられかわれて、はらわたはにえくり返りそうになるのに、内気な為にその憤懣を外部にうまく強く表明することが出来ないといった風の筋書の小説であります。

これで分かる通り筋らしい筋は殆んどないのですが、叔母、お勢、昇の心理的な交錯が、人情嘶風な巧みな会話などを背景として浮彫りにされているのは見事なものです。

すこし理窟っぽく言うと、その時代の封建的な物のからみつきから若い作者がのされる事が出来なかった為に、文三の内気で因循な性格は風通しが悪くて、ひねこびているのです。一個